



欽定新洛川玉川  
前篇  
五

遠  
975  
5



明遠  
號 975  
卷 5

本清

復讐言野路の玉川卷之五

滄海堂主人編述

廢宅の清風



斯々沖津浪龜之助ハ思ひがけりて三津寺におつて兩人  
の娘よわひ尚伴りて其住家よつて三津寺より東へ  
三丁むらり隔ア一町まで甚も倦き住居る内みハ父乃  
市兵衛足痛の病ニ腦ミ打臥さるが斯と見より起上る漸  
床と這出龜之助と敬ひて上座より直し絶え久しと禮を



演まば亀之助も慙る應答しつ且此爲躰と尋ねるる市兵  
 衛の咳しつ京師もわやく思ひもあつぬ閑取の横死の後足  
 下は別きて故地は帰て二年ゆかり過る丹打つとて商ひよ  
 損失わやく故所彼所は借けけ金のつくのひ出来がうく  
 侘まて此の猶豫あく公り訴へて嚴しくも取立るる止吏  
 と得ば家財の有さけ賣しるる是とくづけ親子二人  
 手と身より辛ふとて故所は逼塞し世とるる半段も  
 あつた娘と持しと幸ひよ或人のすめは任せ娘二人を

奇妓とあ細き煙と立侍るるく加へて過し年より  
 吾足痛の病より合行歩るる膝行とより尚も女  
 子も苦と重の身の薄命と朝夕は歎くの外の侍らんと語  
 ると聞て亀之助は何と答ん様もさる実所理とさ俯そ  
 ちば詞もさうりしが互ひの説話の其中は二人の娘の甚早  
 く酒肴と調へ携へつとさゆぐと饗應つ稻河の姉乃  
 のあつ今父は聞せも通る吾儕ホ打つとて仕あはせ  
 の同胞ともは耻しと河竹の身とより果しも皆こそ



野路の玉川五

前世の約束をこそ去あぐり、此薄命ハ借おきて悲を  
 関取れ災難おのひもよめぬ吾儕より更おこり終り何  
 るの御最期と思ひ出して泣きなり何とぞ敵の手づから  
 聞出しまは足下は告てせめてもの恩と報せんものと明くれ是  
 の心よかくまごど夫と見つけし事もろく空しく幸と暮せし  
 此頃京師の客河をて此三津の泊りる坂松屋の何がが  
 めに招くれ折れ彼所はまのりしが此青樓の料理方を勤  
 むる九助とよぶる男河を是はたしうふ山右右門が子分と云い

九郎藏とやよぶ者さうんと思ひしゆ、妹は言ふく渠が身  
 の上さぐりせし仲居お熊ととる者の彼九助が女房さく  
 此お熊の兄る者大津の里は住居する、若や是は日頃  
 尋ゆる山右右門とて有まじと哉と尚も九助は親に色  
 と穿鑿しとて、のりも同胞のりもは連立ゆふ我を  
 思ひ出さんも計がごとと賤女の其後病氣と偽りかへとへ  
 立ちて妹のよまのせと語りと語とまて亀之助は五とせ  
 ぶりの手づから得る悦ぶと語りは、借又亀之助の妹は向

此頃坂松屋より京師の客とつづまるのりや金剛力藏と  
 よぶ角力取の供せびやと尋ねるゝ妹の打らるゝと憚れも金  
 剛とよべる年若の閑取とや一連あり且那と西川屋と聞  
 とづるも谷ふらふ沖津浪のわ笑つ然もわわんといれ里を  
 八重花とよべるまよと尋ねるゝ妹の不審さうと憚れも  
 今までの八重花と名を更めとべりしとより亀之助の横  
 手とらち扱の此ほど吾親方あそぶ度毎ひいさへして招き  
 よしと聞おとびし奇妓は八重花といおんまうりしうその金

剛力藏こそ環山力右工門が忘まぐさの二子より又西川屋の  
 何某の親より無二の貝の肩の且那と我もひとく供と  
 何方も行をいられど暗く敵と尋ねる身され人目も立  
 り。これ。是と辞して供せられ。今日までおんまうり  
 一とらるゝと同胞が儲の秋程つとあひし金剛ねい  
 思ひ人の御子とておしせしと駭きつ且あろびつ市兵衛  
 も諸も又思ひがけらるゝ物ぐらうとて口管よろこびぬ  
 亀之助の二人の娘と尚も敵の在処とさぐる手段とたけひ

談ひく其日ハコウレク帰ヤル者又料理人の九助ハコト  
 三月の末つうさより来ヤル。三月の末ハ六十日ハコウレクの日数  
 と勤め既ハ六月上旬ハコウレク。何まハアても幾内の繁花  
 土地の遊里ハ水ハ立一美婦のまを女房お熊ハ  
 雪と墨ハ尚ちハあまハ此頃志ハ疎ハ  
 余ハ心ハ折ク。哥妓の八重ハ折所ハ  
 来る毎ハ親ハ詞ハ甚心安ク。吾ハ心のハ斯般  
 手段ハ夢ハ吾ハ心ハ

不覚ハ可笑ク。

○濱路の夏草

于茲浪花江の南ハ三津の濱ト名所あり。  
 是ハ古ハ哥ハ大伴の三津の濱又三津の浦ハ詠出ル。此  
 濱ハ應神天皇ハ鎮メ奉ル神廟あり。是ハ俗  
 ハ三津の八幡と賞ハ宮殿魏トシテ四面ハ輝キ神威  
 靈驗日ハ新クテ詣入晴雨ハ撰ル社頭の賑ハ



大津くいの  
状でござり  
たしうま  
おとせ  
中まへ

京橋脚

野路の玉川五



九世

いり  
大とん  
おせいで  
ぶごりまへ



こと亦たぐひは然るん又此社頭まづまて三津の泊とて  
 る所あり是は江口神寄又ひとて遊女寄妓多く住て寄  
 ていくる他浪の浮穴株の夢の假そめは賓客とてまぐさめ諷  
 何し舞あり調るありとて昼夜糸竹の音とて此実浪をの  
 津第一の繫るるり儲此を街の風とて産土神ある天皇  
 の宮に祭礼とい神慮とすといめれめ数多の遊君さぬぐ  
 乃姿は粧ひ糸竹と調て神と詣すことあり是と天皇祭  
 此遷物と稱ふされが祭礼は六月十四日五日の両日とて此日

と花街の紋日とせり然まども其前つくとより役あはは遊  
 君は足とてとて三津の泊に茶屋乃軒端と移り行くと  
 何り是と見んと羣集るるり夥とて西川屋乃礼  
 三良も此遷物と見物せんと帰國と見あはせ待をよ十一日の  
 夜に全くとて出るよりと坂松屋より告来ると其夜の  
 必らび至るべしと指とてとて待とびる扱亦此ほど亀之取  
 より八重を同胞が因縁と聞くと其後たぐひは名のり合  
 くとては具は肩とあはるが既と六月十一日も成るれば坂松

屋よの表ざりてと晶中よは杜の秘りの見物の用意まらけ  
 る料理人の九助の好はとより八重花よは西のまねく只官  
 こぐと居るが今夜の京師の客衆を揚らまこよ来  
 まるよと聞ふ日頃思ひの有けと細くと文よ志と  
 免會まは是と渡さんと伊勢合羽の并形る烟草袋入  
 おきん今日の常より事繁るれば朝のほどより料理より  
 ぞ着おとらとあり折くく京飛脚の男来りく大津より  
 まぬりく一通の状と九助まこ心せり帰るける

九助のうけとて表書とるる岩右工門より来り状を  
 後よゆりひり見んと八重花への志りくもは烟草袋  
 よとて置尚も残り料理と仕る朝よりれくよま  
 やれり好物の酒と茶碗りたく過るむりよのよま  
 が思ひも眠るをささせし其料理場の斤と  
 りく肘とまの轉び前後もまれば即より仲  
 居のお熊の好はとより九助が心不覚まありく八重花よ  
 うらこ所業も手よつらと悟りひとすく秘くよ

こころと世疾一つうくも言らるさんと思へども未だたしうらま  
 證拠もえざれば何とぞそれ実否を見出さんと明くも心  
 とらるしめりるが今九助が彼処にありと暑さのつぐれと酒  
 の酔と前後もあはれ打ふと煙草帯さへ懐より出  
 る正体もあくアとくは是さふとひと思ひより杖煙草  
 帯とひくさるるも推慮よふが八重をの名とあはれ世  
 一通の支りりしうも儲こそ斯る悪しき證こそ出来まうと  
 せは立胸を打まづめ支と奪ひくこそと退さ入る方あくと

披見るに思ひのつめと書つて必らば今夜の忍びまふは  
 也へ暫しうりも首尾しうひと思ひとくさせ悪く  
 あど呉くもあはれ華まうせと書らるお熊はんく  
 燃りのおひい去あくも薄情夫の他心うな五午廿このうて  
 連とひく互まつたせとら  
 今更何ゆえか心あはれつるやと立つ居つ思ひ巡ら  
 す廻り心の邪まつりぐ支の様子とおひいはい是れ全く夫の  
 思とゆい更とも久び八重をの方ありも豫く言する棧の



ありて夫も渡べと。他心の出よ。遠く。のりて安き世中の  
 若き男のくせられど。吾と夫婦の中なりとい。知しおのりよ  
 八重巻が突く憎き為業なりと。恪気嫉妬の心。思忽茨  
 しく。此上へ。八重巻を人あまび殺し。夫が思の根をも断る。  
 速くんと女の浅畧を。立す死まの悪計こそ。突も薄情  
 事どもありと。畢竟此悪婦のうめ。横妻を誅するや。そら  
 後篇は解分ると。讀得く知べし。

復讐野路の玉川卷之五終

